

もくじ

1	特集1 巻頭座談会	
8	GK150に向けて	同窓会会長 木方伸一郎
9	「同窓会総会」をお祝いして	岐阜県立岐阜高等学校 校長 石田 達也
10	ウィズコロナ・ポストコロナ時代の未来予想図	令和四年度運営委員会委員長 伊在井みどり
11	特集2 歴史を築き、未来を創る	
19	特集3 恩師からの便り	
23	特集4 同窓生たちの寄稿	
33	令和四年度岐阜県立岐阜高等学校同窓会総会	式次第
34	議事	
36	創立一五〇周年記念事業について	
38	令和三年度岐阜県立岐阜高等学校同窓会	決算
39	令和四年度岐阜県立岐阜高等学校同窓会	予算
40	令和三年度岐阜県立岐阜高等学校同窓会総会	決算
41	令和四年度岐阜県立岐阜高等学校同窓会総会	予算
42	岐阜県立岐阜高等学校同窓会規約	
43	岐阜県立岐阜高等学校同窓会役員(案)	
44	岐高だより・学校案内	
58	令和三年度 大学合格者数	
59	会報協賛広告	
161	令和四年度岐阜県立岐阜高等学校同窓会総会運営委員会	名簿
162	広告(協賛の御礼)	
163	編集後記	



GK150に向けて

岐阜県立岐阜高等学校同窓会 会長 木方 伸一郎

コロナ禍での三回目の同窓会総会となりました。

一昨年は、松波総合病院松波和寿運営委員長を中心に、医療関係に従事されている同窓生の皆さんを中心に、情報満載の会報を編集していただき、ここ数年に参加いただいている方々にお配りしました。また昨年は、岐阜大学篠田成郎運営委員長を中心として、冷静にいろいろな対応の検討がなされ、想定される感染拡大をレベルに分け、それぞれの場合での対応策を考え、オンライン参加と会場での参加の組み合わせを工夫していただきました。そして、同窓生による素晴らしい和楽、感染対策の講義、そして、オンラインによる楽しいトークセッションが、webで配信されました。

今年は、昭和五十四年、平成元年、そして平成十一年卒の皆様が、安江病院伊在井みどり運営委員長を中心に、大変お忙しい中、また、なかなかコロナ禍の動静の予想がつかない中、この過去二年の経験を引き継いで準備を始め、企画・

会報の編集・広告および協賛金集めなど多方面にわたりご尽力いただきました。

養老孟司さんは、著書「ヒトの壁」で人生そのものが不要不急ではないかと述べていますが、同窓会は、まさに不要不急なばかりではなく、いわゆる三密そのものが目的であるような行事です。それでも、顔を合わせて集うことの意義はあります。今後もいろいろな都合により会場へ来たくても、来られない方々は、たくさんいらっしゃるかと思えます。コロナ禍が過ぎ去った将来の同窓会総会運営のためにも、この挑戦は有意義であったのではないかと考えます。

同窓会総会の運営の当番は、十年に一回、計三回まわってきます。広告集めや、動員は、皆さんお忙しい方々ばかりなのに、この不要不急な当番で大変なご尽力いただきますが、岐阜高校の当時に一緒だった仲間が、それぞれの道に船出して、また、この機会に集って同じ目的に向かって協力していくことは、決して必要不可欠なこと

ではないですが、楽しいことだったと経験してみています。

今年三月に卒業した岐阜高校の生徒の皆さんは、最後の入試まで、コロナ禍に翻弄された三年でしたが、力強く、百折不撓の精神で新しい生活に向かってスタートしました。何年か後に、私たちが経験したように、また、この同窓会で再会し、集っていただけることを祈念します。

いよいよ岐阜高校は令和五年に百五十周年を迎えます。同窓会役員会では、学校や、PTAの皆さんと一緒に、この百五十年の節目をどう生かすか、GK150と称する準備・実行委員会で、協議してきました。百五十周年記念会では、また、皆さんと声高らかに、「学海の波 荒くとも 希望の岸 遠くとも、華陽の健児 心雄々しく 百折不撓 つとめてやまず」と歌えることを心から楽しみにしています。



「同窓会総会」をお祝いして

岐阜県立岐阜高等学校 校長 石田 達也

令和四年度の岐阜高校同窓会総会が、木方伸一郎会長様をはじめ役員・運営委員の皆様方のご尽力により開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、日頃から本校の教育活動に対し、格別のご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年の同窓会総会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、一昨年度は中止、昨年度はオンラインでの開催となりました。本年度こそは以前のように皆様が一堂に会して、顔を合わせて懇親を深める機会となることを期待しておりますが、感染状況がなかなか改善せず、昨年度に続き、本年度もオンラインでの開催となりました。

同窓会役員・運営委員の皆様におかれましては、さぞかし苦渋の選択であったであろうと推察いたします。しかしながら、同窓生の絆を大切に今後に繋げていくという思いをお持ちいただき、直接お会いすることはできませんが、こうして開催していただけた

すことは、同窓生としましても、校長としましても、大変ありがたいことであると思っております。

さて、昨年度は、新型コロナウイルス感染症対策を講じつつ、授業・学校行事・部活動等の形態を工夫しながら、可能な限り実施することに注力してきました。感染症対策と教育活動との両立、いわゆるウィズ・コロナの考え方です。

具体的には、授業では休校期間中や自宅待機の生徒へのオンライン配信、文化祭ではメモリアルセンターの広い会場での開会式実施や三年次生クラス演劇の動画撮影とYouTube配信、部活動ではマスク着用での活動の徹底など、単に中止するのではなく、柔軟な発想で工夫し、前例にとらわれな方法で実施することで、これまで当たり前と見ていたことを見直し、改善することもできました。加えて、本校では現在、世界で通用するグローバルリーダーの養成を目指し、その方策として探究的な学びに力を入れています。国際交流や最先端科学の分野での講

演会や体験プログラムを生徒に提供しており、その成果として「科学の甲子園」「模擬国連」「即興型英語ディベート」等の全国的・国際的な大会において、多くの優秀な成果が上がっています。

来年度、本校は創立一五〇周年という大きな節目の年を迎えます。そのための実行委員会が設立され、記念式典や講演会を始めとする記念事業がいくつも計画されつつあると伺っています。同窓会の皆様には、今後も引き続き、多くのご支援をいただくことになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、本年度の総会を運営されます伊在井みどり運営委員長をはじめ、当番幹事の昭和五四年、平成元年、十一年卒業の皆様のご尽力に感謝申し上げますとともに、会員の皆様方のご健康とご多幸、そして同窓会の益々のご発展を心から祈念申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。



ウィズコロナ・ポストコロナ時代の 未来予想図

令和4年度岐阜県立岐阜高等学校同窓会総会 運営委員会 委員長 伊在井みどり

本日は、本当であれば懐かしい皆さまの顔を拝見して、総会へのご参加、本会報への広告協賛やご寄附をいただきました関係各位、個人にてご協賛をいただきました皆さまへの感謝の気持ちをお伝えしたいと思っております。残念ながら、残念な結果となり昨年に続き今年も総会を開くことができませんでした。然し、昨年の実行委員会がオンライン配信、ホームページの開設などのICTを利用した同窓生とのつながりの確保について、一年かけて準備されその礎を残していただけましたので、今年の実行委員会の力を結集して今回のオンライン開催にたどり着くことができました。そこに垣間見る岐阜高校同窓生の百折不撓の精神に頭が下がる思いであり、今年と同窓会総会運営幹事当番の昭和五四年、平成元年、平成一年の卒業生を代表いたしまして、心から御礼を申し上げます。コロナ感染症の蔓延が始まって三年目。第五波による緊急事態宣言が終結した時点では、今年こそ、総会を開けるかもしれない。いや何としても開こう。という意気込みで役員一同が運営にあたり、特に私たち

は今年が当番学年を務める最後の年であることもあって、総会のアトラクションについては特に気合を入れて企画しておりましたが蔓延防止等重点措置期間の延長により方向転換を余儀なくされ、ぎりぎりまで検討会を繰り返しました。このように、新型コロナ感染症の蔓延は、公衆衛生上の脅威を与えるだけでなく、人と人との交流を遠ざけ、それによる経済的な打撃を与えるなど二次的・三次的な影響を与えています。しかし私たち人類は有史以前から天然痘、ペスト、梅毒、スペイン風邪などと戦ってきました。人類を滅ぼしかねないこの世界的な大流行と向き合い、戦い、勝利してきたのです。今、私たちは新型コロナウイルスという新興感染症蔓延の真只中にあつて終息に向けて戦い続けております。そして新型コロナウイルスの蔓延によってもたらされたオンライン授業、在宅リモートワーク、リモート会議、各種学会のオンライン化、研修会のe-learningなどを広げること、介護・育児などであっても、障害や疾患により学校や仕事に行くことができない状況下にあつても、学習や仕事・

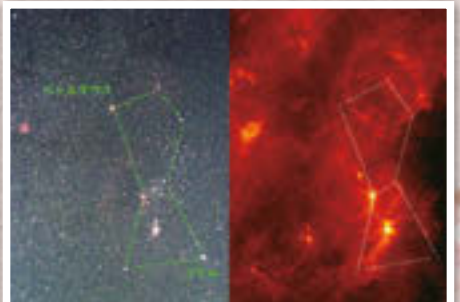
研修の機会が得られるようになりました。どんな時も、災難・災害に打ち勝とうとする強い気持ちをもっていれば、手段や形を変えることで（トランスフォーム）災い転じて福となすことができるのです。その中であつて変わるきっかけを与えてくれるのは「人とのつながり」であることを忘れず、利益とは無関係の繋がりを学生時代に築くことを大切にしていたきたいと思います。この「人とのつながり」があるからこそ国内にとどまらず世界中に散らばっている同級生ですが、総会の時期に岐阜の地に集まれば、離れていた四〇年余りの年月も忘れて等しく岐阜高校在学時代にタイムスリップし再会を喜ぶことができるのです。「人とのつながり」を大切にすることを岐阜高校生のアイデンティティーとして繋いでいって頂きたいと思えます。最後になりますが、本日ご視聴を賜りました皆さま方にとりまして、画面の上だけでも懐かしい再会や心温まる楽しいひとときとなりますことを祈念申し上げます。私の挨拶とさせていただきます。

特集2

歴史を築き、未来を創る

岐高生時代、彼らは何かをやり遂げると、皆が期待していた同窓生が、期待にたがわず、やってくれました。

築き上げた偉業、これから創っていく未来を、熱く語っていただきました。



I like to see a man proud of the place in which he lives.
自分の場所に誇りを持つ人間が好きだ

戸田達史 (昭和五四年卒 三年一組)



研究して絶対不良をよくなるようにしたいというのが、神経内科に興味を持った理由です。

医局から派遣され勤務した筋ジストロフィー専門病院で福山型筋ジストロフィーの患者さんに出会いました。この病気は生まれて間もない頃から乳児期にかけて、筋肉の力が弱く発達の遅れが見られます。筋肉の病気なのに知的発達の遅れ、ひきつけなど中枢神経系の異常を伴い、福山先生が最初に報告されたので福山型と呼びます。日本人に多く、日本

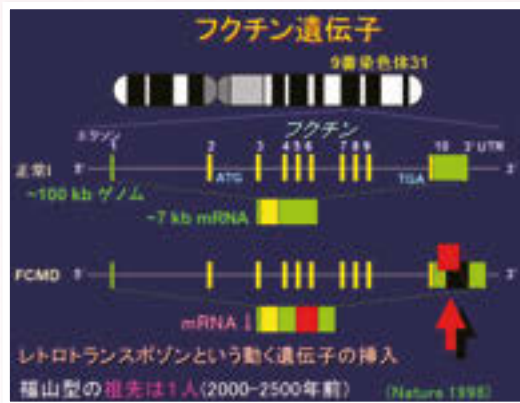
早いもので岐阜高校を卒業してから四三年が過ぎようとしています。東京大学医学部卒業後、東京大学神経内科に入局し、東大病院および関連施設で神経内科の診療を行いました。神経内科とは、精神神経科や心療内科と間違えられることもあるのですが、脳神経系が侵される病気により認知症状が出たり手足が動かなくなったりする病気を扱います。脳梗塞、認知症、パーキンソン病とか、筋萎縮性側索硬化症 (ALS)、筋ジストロフィーも対象です。難病も多いです。決してまじめな学生ではなかったのですが、教科書に、「筋萎縮性側索硬化症…予後絶対不良である」と書いてあった事が頭に残り、



人では九〇人に一人が遺伝子変異の保因者といわれています。お座りまのでできるお子さんは多いのですが、歩行可能な子は一〇%以下と数少ないです。

「日本人の名前のついた病気は日本人の手でなんとかしたい」と思い、全国の病院に手紙を書き山中まで採血にいき、福山型の原因が九番染色体に存在する事を明らかにしました。その後、東大助手、東大医科学研究所助教授に異動してからも解析を続け、一九九八年原因遺伝子フクチンを同定しました。二〇〇〇年阪大臨床遺伝教授に着任して自分のラボをもち、本症やパーキンソン病の遺伝子・病態の研究を行い遺伝子診療に携わってきました。一連の仕事は幸運にも二〇〇八年「朝日賞」を受賞する事ができました。そうしているうちに二〇〇九年神戸大学神経内科教授に推薦され、オリジナルである神経内科に戻ることにになりました。さらに二〇一一年には、本症はフクチン遺伝子に入り込んだ別の「動く遺伝子」による遺伝子の切り取り異常症であること、この筋ジスがひよっとしたらアンチセンス核酸というある種のDNAの薬で遺伝子

に蓋をして治療できるかもしれない、ことを発見しました。筋ジスのような不治の病も、その原因が発見されて、治療も視野に入るといつ時代になってきたのです。このアンチセンス核酸は医薬品承認を目指し、製薬会社とともに開発し昨年から試験中であります。現役の間にこの薬を上市させたいと思っています。



実は一〇年前の幹事学年の時も執筆しており、その時は「雪埋梅花、不能埋香」というタイトルで、そのさらに一〇年前は「東京と大阪」というタイトルでした。この一〇年のうちで、自分にとって一番思い出に残っていることといえば、なんと言っても学士院賞受賞でしょう。二〇一七年第一〇七回の日本学士院賞を受賞することになり、上野の日本学士院にて天皇・皇后両陛下のご臨席のもと授賞式が行われました。受賞のテーマは「福山型筋ジストロフィーを含めた糖鎖合成異常症の系統的な解明と新しい糖鎖の発見」、遠藤玉夫先生（都長寿医セ研究所）との共同受賞です。授賞式当日はまず天皇皇后両陛下に、内容を簡単にご説明しご質問を受けました。当初は緊張しておりましたが、予定通りの時間で意外とすらすらと説明出来ました。また授賞式では緊張の面持ちの中、賞状・メダルなどを拝受しました。陛下は「光明があらわれてきたということですね」と、やっぱりおっしゃることが高貴でした。その後一〇人の受賞者は皇居に赴き、宮中茶会に招かれました。賜り茶とはいうものの、実際は豪華なフランク

ス料理が五品出てきました。テーブルは五つ。歓談しながら一品を約一五分かけていただき、終わると皇族方がテーブルを移動される「おもてなし」でした。侍従長一行、宮内庁長官一行、秋篠宮殿下妃殿下、皇太子殿下、両陛下（当時）の順番で計一時間半歓談させていただきました。貴重な経験でした。



もう一つは古巣の東京大学神経内科教授に二〇一七年に異動したことです。これも想定外の範囲外の出来事でした。現在、大学と関連病院一〇〇名の医局員とともに診療・教育・研究をおこなっています。また日本神経学会代表理事として

九、〇〇〇人以上の神経内科医の学会の舵取りをしています。

いつも年頭の挨拶で自分が好きな言葉を教室員に語っているのですが、その中の一つにリンカーンの言葉として Like to see a man proud of the place in which he lives. 自分の場所に誇りを持つ人間が好きだ、というのがあります。世界的建築家の隈研吾さんを例えにして、バブル崩壊後に経済的にも精神的にも苦しい時期があったといえます。そんなある日、地方での仕事の依頼が舞い込んだ。バブルの頃とは比べものにならないほど小さな仕事だったが、食いつなぐために高知県四万十川上流の橋原町に向かった。町の九割は杉の森林が占める山間の小さな町だが、町の人々が長い間大切に育ててきた杉の一本一本に深い愛情と誇りをもっていることを知り圧倒されたという。これまで大都市の仕事現場で語られるのは工期と工事費のことばかり。ところが橋原の人々が語るのはこの町への誇りと愛情だった。限さんは自分が変わっていくことを実感したという。それまでは大きな予算のプロジェクトを手がけることがいい建築を作る条件だと思っ

ていたが、それは建築の善し悪しとは全く関係がないことに気づいた。どこに行っても自分が今居る場所が楽しくなるよう頑張りなさい、ということなのである。人生様々なことがあってどこにいるかわからない様な場合もありますが、私も自分の意思で考え三ヶ所の大学を異動してきたが、自分の場所を好きになるよう頑張ってきました。

イタリアの世界遺産アマルフィに
関係して TIME TO SAY GOOD
BYE という歌があり、難病に SAY
GOOD BYE と言える時が来る事
を祈って、今後も研究・診療に頑張っ
ていきたいと思えます。



「フレール、フレール、岐阜高！」

高嶋裕樹（昭和五四年卒 三年五組）



昭和五三年春、岐阜高校野球部が「春のセンバツ」に出場。私はその時、花の応援団長として「甲子園出場？」をすることができました。一回戦を勝ち進み、二回戦で強豪桐生と対戦することになり、周りが負け予想を口にするのに憤り、「負けたら俺は頭を剃る！」と断言して臨みました。試合結果を受け、春の始業式で校歌斉唱の指揮をとるため全校生徒の前に現れた私の丸坊主頭に、驚きと笑い声が上がりました。しかし、それは同時に野球部のメンバーをはじめ皆が、私を応援団長として心から信認してくれた場面であったと思います。

春夏連続出場を狙うとき、甲子園という場において、伝統あるバンクスタイルで応援するのは無理があると感じた私は、その様式を改革したいと考え、応援団幹部を務めていた辻竜也君と二人で春の早慶戦を見学に行きました。彼の勧めで早稲田側を選び、長い入場待ちの最前列に行き、「岐阜から応援の勉強に来たので、目の前で見学させて欲しい」と頼み込みました。盛り上がる野球の試合などそっこの中で、早稲田大応援部の応援指導を目に焼き付けました。感動し舞い上がった私たちは、帰りの新幹線のデッキで二時間、みっちり復習をしたことを思い出します。それ以来、岐阜高校に早稲田の応援スタイルを導入。残念ながら夏の県大会では県岐商に敗れ、甲子園で再び応援する夢は叶いませんでしたが、早稲田大学を志望する夢に変わりました。

小川啓子との遠距離恋愛（のちに結婚）が燃え上がり、Uターンして名古屋鉄道に就職することにしました。お調子者なだけで、気が小さく苦難に弱い私を支え、社会人として成長させてくれたのは妻の啓子であったと思います。しかし、一二年前の二〇〇九年十二月、四八歳で他界しました。死を以て最後の教えを私に示したと思い、それ以来、強い信念を持つて仕事に取組んでいます。私は、当社を地域No.1のまちづくり会社にしようと不動産事業を強化し、名鉄名古屋駅再開発計画を打ち上げました。またコロナ禍の真っ只中の昨年六月、社長に就任。「地域を創る、社会を支える」企業として再生、成長を図れるよう奮闘しているところです。

高校時代、応援団活動が面白くなり、中途半端な形でやめてしまった剣道でしたが、亡き妻の勧めで再開し、稽古を重ねています。剣道部の村瀬隆平先生を困らせた劣等生でしたが、今は少し優等生の仲間入りができたような気がしています。コロナ禍が明けたら、岐阜高校剣道部で行われている稽古会に参加し、思い切り声を張り上げたいと思っています。



「フレール、フレール、岐阜高！」

「道を拓き、山を動かす」

新岐阜百貨店があった頃が懐かしい名鉄岐阜駅。いま岐阜の魅力あるまちづくりに向けた玄関口となるよう、駅周辺開発計画を検討中である。岐阜のまちの魅力向上を図るためには、中心市街地において「歩いて楽しいまち」を創ることが必要である。

中心市街地には忠節橋通り、金華橋通り、長良橋通りの三本があり、南北を貫く。金華橋通りは、道路幅が広く、車中心であり、店舗が乏しいので、ここを歩いて楽しい通りにするのは難しい。景観を整備し、都市の風格を象徴する通りとして位置付けることが望ましい。一方、長良橋（神田町）通りは、道路幅が比較的狭く、雨を凌げるアーケードがあ

り、店舗がつながっている。二本の通り中で、歩行者を主体として賑わいの中心軸にできるのは長良橋通りである。

名鉄岐阜駅はこの通りに面しており、駅周辺開発を計画するにあたり、「歩いて楽しいまち」の起点となることを目指している。長良橋通りに対する駅ビル低層部の空間の開き方を工夫し、駅とまちを繋げたいと思う。そして、地元の合意形成が必要だが、長良橋通りの車線を減らし、歩行者空間を拡幅、一部区間をトラジットモール（車を制限し、歩行者と公共交通機関のみが通行できる街路）化できれば、まちを歩く楽しさを格段に高められるはずである。地元の方々と一緒にまちづくりについて議論し、気運を高めたい。

通りの整備に関し、付け加えて述べておきたいのは「御鯨街道」である。長良川畔の川原町から始まるこの通りは、江戸時代、幕府に鮎鮠を献上した道である。南部にある中山道加納宿とも繋がっており、今でも岐阜の歴史や文化を感じさせる。近辺にある寺社、古民家などを活用し魅力向上を図り、長良橋通りと合わせて回遊性を高めれば、岐阜の「歩

いて楽しいまち」を創造できる。

私はかねてから、次の四つを揃えて、歩いて楽しいまちづくりに取組むことが必要だと思っている。それは、①地域独自の歴史や風土を感じさせること、②自然・環境志向であること、③文化・芸術活動を盛んにすること、④美味しい食べ物を提供することである。

これら四つが揃っている岐阜は、名古屋都市圏の中で、最も自然と歴史、文化に優れた都市ではないだろうか。風情とか情緒というより、(変な意味ではない) 色艶を出せるまちである。多くの人が、そんな魅力を歩いて楽しんでもらえるよう、愛す



る郷土のまちづくりに貢献していきたい。

私にはもう一つ、岐阜において描いている大きな夢がある。それは、新穂高ロープウェイのこと。岐阜高校の同窓生としては林間学舎のときに訪れて思い出深いはず。このロープウェイは当初、上高地までつながる壮大な計画であった。自然保護などの観点から実現していないが、将来的に新穂高と上高地が手軽に周遊できるようになれば、国際級の山岳リゾートが形成されるだろう。いま地元の関係者の方々と一緒に活動を始めている。

名鉄岐阜駅周辺開発も、新穂高・上高地の一体周遊化もかなり長い年月を要するプロジェクトになる。しかし、地域にとつて本当に大切なことは何かを考えて高い理念を掲げ、熱い志を持って粘り強く、新しい「道」を拓き、大きな「山」を動かしていきたい。



空飛ぶ望遠鏡

中川貴雄（昭和五四年卒 二年一組）



丁度、岐阜高校に入学したころのことだったかと思います。「望遠鏡をつくる人びと」（岩波科学の本）という本を読みました。著者は東京天文台（現在の国立天文台）の森本雅樹という天文学者でした。「天文学者とは、夜な夜な、星空を眺めている人」という漠然としたイメージを持っていた当時の私にとつて、この本は、とても驚きでした。ここに登場する天文学者たちは、まず自分の目で星空を見ません。目に見えない「電波」を使って、星空を見ようとしている人たちでした。さらに、その見るための道具である「望遠鏡」、しかも今までにない「新しい望遠鏡」をつくることに、情熱を傾けている人たちでした。天文学者が

「目で星を見ない」「自分で望遠鏡をつくってしまう」という二重の意味で、この本の内容は私にとつて驚きでした。

その後、大学、大学院と進み、私は天文学研究の道に進みました。大学院入学から数えても、もう四〇年近くにもなります。そして、この本の影響もあつたのか、私も「望遠鏡をつくる人びと」の仲間入りをしました。まず、「望遠鏡をつくる人びと」に登場する方たちのように、目では見えない光で宇宙を探ることを志しました。ただし、「望遠鏡をつくる人びと」の中で登場する「電波」での観測ではなく、もっと新しく育ってきた「赤外線」での天体観測を目指しました。そして、その研究実現のために、いろいろな「望遠鏡」を作ってきました。ただし、私が携わってきた望遠鏡は、少し変わった望遠鏡でした。一般に思い描く望遠鏡は、天文台等に設置される地上の望遠鏡だと思っています。しかし、私が作ってきた望遠鏡は、そのような望遠鏡とは全く異なり、「空飛ぶ望遠

鏡」とでも呼ぶべきものでした。「空飛ぶ望遠鏡」とはいったい何でしょうか。

宇宙にあまたある天体たちは、多彩な「メッセージ」を発しています。それには、もちろん目に見える可視光線が含まれますが、それに加えて、目には見えない光、すなわち電波、赤外線、紫外線、X線、ガンマ線が含まれます。天体の本当の姿を知ろうとすれば、可視光線のメッセージだけでは情報不足であり、その他の多様なメッセージに耳を傾ける必要があります。

しかしながら、これらのメッセージのほとんどは、地上には到達しません。地球の大气に吸収されてしまうからです。私が星を見るのに使いたいと考えた「赤外線」も、地上にはほとんど到達しません。そこで、地球の大气の影響を逃れて、天体の多彩なメッセージを受けとるためには、地球の大气の影響を避けるところまで望遠鏡を持つていかなければなりません。そこで、私は「空飛ぶ望遠鏡」を作ってきたのです。

最初に作った「空飛ぶ望遠鏡」は、大きな気球（大気球と呼んでいます）に搭載する望遠鏡でした。この気球

は、全長が一〇〇mを超えるような巨大なものであり、これに望遠鏡を搭載して、高度三〇一四〇kmまで上昇させました。手作り感あふれる望遠鏡でした。この望遠鏡を携えて、アメリカ、オーストラリア、インドなど、大きな気球を打ち上げるのに適したところまで出かけて観測を行い、私たちの銀河系の中で、どのように星が作られているかを調べました。

その次に作った「空飛ぶ望遠鏡」は、人工衛星に搭載する望遠鏡でした。一番代表的なものが、「あかり」という赤外線天文観測衛星（図1）です。これには口径七〇mの反射望遠鏡を搭載しました。ただし、少し変わった望遠鏡で、目的とする赤外線を高感度で観測するための特別の工夫をしていました。それは、望遠鏡全体を摂氏一二六七℃（絶対温度で六K）という極低温まで冷却したことです。赤外線による天体観測の大敵は、天体以外からやってくる余分な赤外線です。しかも、この余分な赤外線は、温度あるものからは必ず放射されるため、頭痛の種です。実は、望遠鏡自身も、強烈な「余分な赤外線」の源となります。この「余分な赤外線」を抑える最も有効



図2 鹿児島県内之浦からの赤外線天文衛星「あかり」の打ち上げ

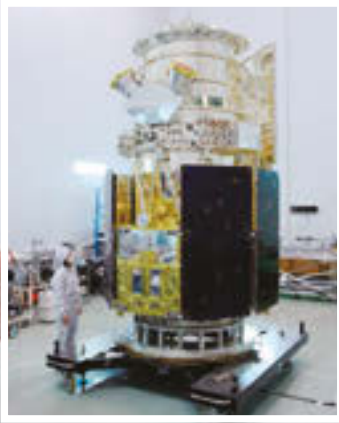


図1 2006年に打ち上げた赤外線天文衛星「あかり」

な手段は、赤外線が放射されないような極低温まで、望遠鏡を冷やしてしまふことなのです。そこで、私たちは、望遠鏡全体をそっくり冷やしてしまつたのです。このことにより、望遠鏡から放射される余分な赤外線が抑えられ、今までにない高感度の観測が期待されました。

「あかり」は二〇〇六年二月に打ち上げられました(図2)。順調に打ち上がったように見えたのですが、軌道に到達した直後に、衛星の

姿勢を決める重要なセンサーの一つである「太陽センサー」が正常に動作しないという、全く予期していなかつた事故に見舞われました。このままでは、衛星の姿勢が決まらず、観測が全くできません。そこで、急遽、壊れた「太陽センサー」を用いないで、他のセンサーだけで姿勢を決定する新しいソフトウェアを開発しました。その結果、何とか観測にこぎつけることができました。「あかり」を用いて、私たちは、銀河系の外の、他の銀河の中で、どのように星が生まれているかを調べました(図3)。

続いて、さらに遠くの宇宙を調べることができないかと、SPICA (Space Infrared Telescope for Cosmology & Astrophysics、図4) という計画に取り組みました。これは口径二・五mという大きな望遠鏡を宇宙に打上げようという野心的なものです。これだけの大型計画になると、日本だけでは実現はできませんので、世界中の天文学者と協力して、この計画の実現を目指してきました。しかし、SPICA計画は、二〇二〇年に、財政的な理由でキャンセルされてしまいました。残念

念至極。

キャンセルは大変に残念なことではあります。この計画の推進を通して、私は世界中の優秀な方たちと出会い、多くの人に助けていただきました。望遠鏡を搭載した人工衛星を実現するには、実に多くの方が関わります。一言申し上げたいのは、その中には、岐阜高校を卒業された優秀な先輩や後輩の方も含まれていました。多くの優秀な方との出会いは私にとって、とても大きな財産です。この大きな財産を活かして、また全く新しい「空を飛ぶ望遠鏡」を作れないかと、いろいろと考えているところです。

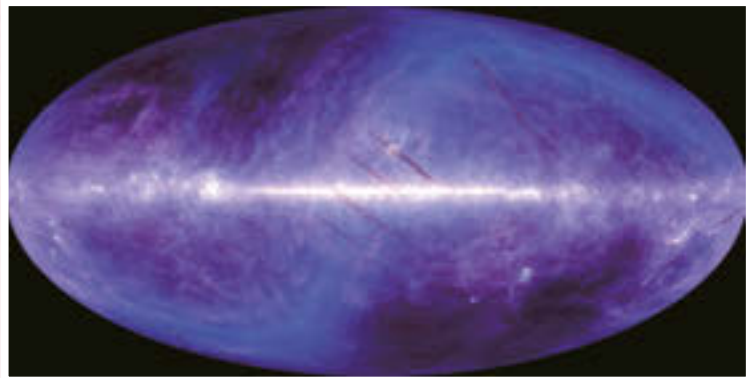


図3 「あかり」が観測した全天の赤外線画像。中央を水平に横切っている明るい帯状の領域が我々の銀河系で、図の真ん中が銀河系の中心方向に相当する。赤外線が明るい領域では、活発な星形成が起きていると考えられる。右上から左下に延びている明るい帯は、我々の太陽系の中の塵が放射している赤外線。

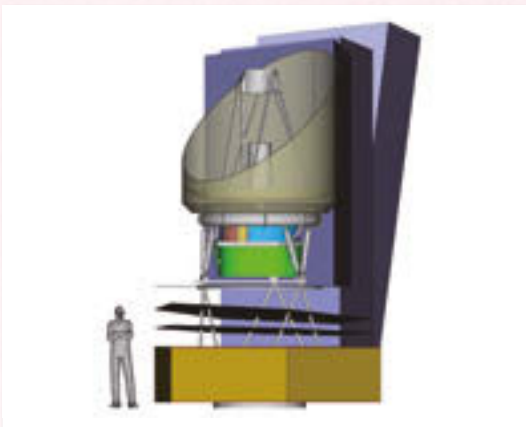


図4 次世代赤外線天文衛星SPICAの想像図。残念ながら実現しませんでした。

思い出の岐高ライフ

～1979年卒業アルバムより～



特集3

恩師からの便り

若き日のわれらが、授業、ホームルーム、進路指導など困らせたり、怒らせたり…

懐かしいあの頃の日々、心の拠りどころとした先生方から温かい便りが届きました。



奇術の楽しさ

昭和54年卒担当 社会科

柴田 文彦

岐阜の文化祭で、教室を舞台に、知的好奇心に訴えた「飛行するカード」の奇術を演じたことが思い出される。それは一〇枚のカードの中の覚えた三枚のカードが相手の封筒に飛行する奇術。

奇術のタネを増やし、演じ方を工夫するのが楽しみの一つ。私は大学の奇術研究会に入会した。合宿では、手技の四つ玉の習得で、一つの玉を指の間に挟み、指の間を転がす練習を朝から晩まで行った。「ターベルコース」という外国の本を部員らと翻訳をした。テレビでの奇術の番組はビデオに録画した。大須演芸場に通り、奇術以外は寝て、何度も同じ演技を見た。名古屋の「UGM」の講習にも通った。マリツクの通信講座も受けた。タネは同じでも演じ方で効果は変わる。

覚えた奇術を人前で演じるのが楽しみの一つ。「親子で手品を楽しむ会」「地区センター祭」・農業祭・子ども会・老人会等で公演した。特に、老人会では花、子ども会ではドラえもん縫いぐるみの出現などが好評だった。観客の拍手が、楽しんでもらえたと感じる目安。

テレビでドリフターズがタネ明かしをしていた。私が演じていると、「そのタネ知ってる。テレビで見た。」と言われ、困惑と憤りを覚えた。子ども会で、白紙がお札に変わる奇術を演じた後、少女が真面目な顔で

「おじさん、この紙をお札に変えられる?」と言われた時は困った。

奇術で校長訓話をした。鏡を大封筒に入れ、尖った棒を差し込む。「鏡は困難で棒は強い意志」と言う。鏡を取り出しても傷は無い。「強い意志があれば困難を乗り越えられる」と話した。

奇術を講習するのが楽しみの一つ。大垣アマチュアマジッククラブや成人学級、OB会で長年講師もした。道具は自作。奇術店で購入できるが、それでは長く続かない。材料を百均や大塚屋などで探し回った。美術教師に頼み、大型カードにアンパンマンなどを描いてもらった。岐阜で担任した生徒が、同じ大学の奇術研究会に入部したと聞いたときは、びっくりしたと同時に本当に嬉しかった。

奇術は「騙す」ものではなく、錯覚や思い込みを利用して、不思議さを生み出す芸術。演者と観客が楽しむ時間を共有することが最も大切だと思ひ、演じてきた。



柴田 文彦 先生

「フルートの経験年数」だけは半世紀を超え一流(笛吹老人)

昭和54年卒担当 数学科

服部 岩夫

岐阜高校には昭和五十一年(二十七歳)から昭和六一年(三十七歳)までの一〇年間勤務し、いろいろ貴重で楽しい経験をした。

その一つとして、勤務して三年目(昭和五十四年)を迎える春、選抜野球に出場が決まり臨時応援吹奏楽団を二月に結成し二回戦終了後四月には解散(偽装?)した。準備期間が短時間にも拘わらず立派に甲子園で応戦することが出来た。団員は一般公募であるが器楽クラブ選択者を中心に何故か天文部員が多かった。

一回戦相手の吉備高校も吹奏学部が無く、近隣の中学校と高校の合同吹奏学団であった。NHKの二ユーで「もう一つの甲子園」として応援合戦を取り上げてくれたが、当時は録画機械も無く記録が残っていないのが残念である。

解散後も「文化祭」、「体育祭」では有志が集まり演奏活動が続け、その活動が認められ昭和六〇年には「吹奏楽同好会」翌年には「吹奏楽部」と認められた。当時のメンバーは本心に音楽が好きで、今もオーケストラ等いろいろな形で音楽を楽しんでおられる。

生徒の皆さんは学業は言うまでもなく、それと平行して自分の興味のある事にどんどん挑戦し極め、学業のみならず趣味の世界も大切に同じ志をもつ仲間同士、お互いに切磋琢磨するなど有意義な高校生活を送っていたことも思い出の一つである。私は平成二十二年三月に退職、その五月に半世紀近く所属している(公社)岐阜県交響楽団の創立五五周年記念公演がウィーンの一ムジックフェライン(ウィーン楽友協会)

で行われ、フルート及びピッコロ奏者として参加した。ウィーンフィルが活動の拠点とする世界的に有名な黄金ホールで自分達が演奏したのである。これは私にとつて定年退職のご褒美、また還暦のお祝いとなった。その後創立六五周年記念公演が愛知県芸術劇場「コンサートホール」で実施され、さらに創立七〇周年記念公演として令和五年五月四日に「ニューヨーク」カーネギーホールでの演奏会が予定されていた。その時私は七五歳、「オケ老人」、しかし残念ながら新型コロナのため中止となった。

一八歳の春、フルートを手にしてすでに五年を数えるが、歳と共に音色は「妙なる調べ」から「耐えならん調べ」へ、「指は回らず目が回り」、「楽譜は拡大しても見辛く」、練習しても五分後には元に戻っている、暗記も出来ない。いよいよ「潮時」。

母の介護とコロナのため交響楽団を休団しているため、介護の合間にマイナスワン(カラオケCD)を伴奏に演奏(?)を楽しんでいる。

今はクラシックをジャズ風にアレンジした曲を相手にしているが「リズム(特にシンコペーション)や音の配列」「正確なアンポ」などが手ごわく苦労している。



服部 岩夫 先生

大学入試の変遷

平成元年卒担当 英語科

奥谷 文隆

教員人生も終わりが近づいてきて、その日々を振り返ると、そのほとんどを母校、岐阜高校を始め、いわゆる進学校で送ることができたことを幸せに感じています。かれこれ四〇年以上進学指導に関わってきた、他に取り柄もないので、大学入試・教育制度について、(紙面の都合上、国立大学中心に) その変遷や最近気になっていることを書きたいと思います。読者の皆さんは、どの時期に受験でしたか。

まず、私が高校生だった時の大学入試は、一期校・二期校の時代でした。旧帝大を中心とした一期校と地方国立を中心の二期校に分かれており、東大と横国というような受験パターンが定着していました。これが、大学の序列化を産んでいるというような理由で、一九七九年度から大学共通一次学力試験が始まりました。共通一次と言っても大きくは五教科七科目一〇〇〇点満点の時代と五教科五科目八〇〇点満点の時代に分かれますが、細かく見るとほとんど毎年のように変更が行われました。五教科七科目の時代は、国立を一校しか受験できませんでした。そのためか、大学の序列化は、拡大してしまいました。

五教科五科目になると、受験機会を複数化するため、A・B・C)のグループ分けがされ、初年度は東大と京大のダブル合格者が多数出て、翌年から辞退者対策のために京大がグループを変える事態になりました。それ以外にも、名大医学部志

望者が、東大理一・理二を滑り止めにしたことなどを覚えていきます。最後の三年間の混乱の後、一九九〇年度から大学入学者選抜大学入試センター試験に変わり、私大参加や国立大学では受験科目の指定が始まり、大学入試が多様化(複雑化)しました。二〇〇六年からは、英語でリスニングが導入されました。私大入試は、この頃から力オスとなり一

大学一学部を何度も受験できる制度が広がりました。同じ大学を三つ以上出願すると割引とか、一度の受験でその大学のすべての学部の可否を判定する試験などが見られるようになっていきます。

二〇二一年度、大学入学共通テストが、始まりました。このテストへの変更は、記述式の出題や英語の外部試験導入など、不可能なことが盛り込まれていて、迷走を続けました。結局、共に見送られたが、今年度の試験では、数学・理科の問題に関して議論となっています。数学の問題を見れば驚かれると思います。さらに、入試制度ではないですが、新指導要領では、「現代の国語」から文学作品がなくなるなど、文部科学省の暴走・迷走が続いています。



奥谷 文隆 先生

守破離

平成元年卒担当 英語科

望月 俊実

「黙想。礼。」
凜とした張り詰めた雰囲気。キャンプの音が寒の突き刺さるような空気の中、体育館に響く。

一月第三週の午前七時から八時までの日程で、寒稽古が始まった。切り返しを行い、相互の稽古に入る。我々三人の指導者に、生徒が全力で向かってくる。こちらも生徒の「熱」を押し返す「気」で迎え打つ。生徒の長所を伸ばす打ちを受けつつ、指導者の打ちも出す。隣では、岩田孝志先生が巧みな竹刀さばきで、生徒に対峙している。上下を柔軟に攻める「勝負師」。思えば、岐高へ赴任する前々日、事務室で初めて話した先生が岩田先生だった。剣道部でも同じ学年の担任としてもずっと一緒だった。定年退職後、私学でも一緒にやり、何か不思議な縁を感じる。稽古を終え、我々も生徒も授業に急ぐ。英語教育にも、微力ながら精一杯取り組んだ。読み、書き、暗記を徹底する「岐高英語」。空き時間には、小テストの採点、プリント作りなどを行い、休む時間はほとんどなかった。放課後は、会議以外は道場にいた。英語教育と剣道指導に必死だった。忙しかったが、充実した日々であった。放課後の稽古は、四時から五時半まで。基本稽古のあと生徒との稽古。生徒の攻防に対応し、生徒の得意技で勝負するように心掛けた。朝稽古をやっているため、張りのある稽古になった。生徒の稽古を受けてから、村瀬隆平先生に向かった。村瀬先生の稽古はきつかった。小手が目にも止まらぬ速さで、色々な方向から来た。苦しまぎれに面を打つと、待つ



望月 俊実 先生

てましたとばかりに、胴を返されてしまう。小生が攻めあぐねているあたりで、「三本いこか。」と言われる。一本目は、先生の完璧な小手。二本目、小生の不十分な面に「参った。」と言われる温情。「勝負。」と先生。ここからが長かった。小生の息が上がり、物足りない打ちばかり。限界を讀まれ「引き分け。」やっと終わった。村瀬先生には、岐高在職中一〇年間鍛えていただいた。部活が終わると、長良高校へ向かった。県下の教員チームの稽古会だ。手ごわい相手ばかり。自らの技術向上に結びついた。午後七時、大急ぎで次に関ケ原へ行った。不破郡の稽古会である。岐高で二人の強豪に、稽古をしていたのだ。九時に終了。こうして、四回目の稽古を終え、行き着いた先が「離染」であった。まさに、リラックステ、捉われることから離れることを楽しむ。つまり、自然体で臨むことが、『守破離』の「離」であると考えるようになった。今思い返すと感慨深い。そして今も、英語と剣道を学べる最高のぜいたくを味わっている。

往事渺茫

平成11年卒担当 学年主任・国語科

小池 秀男

ある日、突然の電話。同窓会総会
会報誌の原稿依頼だった。

「いや、その頃僕はもう担任を
持っていなかったんじゃない？」

「ええ、でも学年主任でした。」

「そっか、あの学年だったのか。
一、二年と持ち上がったって、来年は
当然三年生、と思っていた三月、新
二年生の学年主任を要請された。

担任を持たない学年主任は寂し
い。学校にホームルームがない。毎
朝教室で迎えてくれる生徒がいな
い。ただ、人生の得失は表裏一体。
それからの二年間、僕は別の楽し
みを知るようになる。

二年が過ぎて、君らの卒業の年、
僕は転勤希望を出した。一緒に卒業
して、八年間の岐高勤務にピリオド
を打とうと思ったのだ。

自由登校になったある日、学年の
先生たちと反省会をもった。延々三
時間、議論を尽くし、次年度に向け
ていくつかの提言がまとまった。こ
の先生たちともう一度同じ学年を
持ちたいと思った。

その足で校長室に駆け込み、でき
ればもう三年、せめてもう一年、こ
こにおいて欲しいと頼んだ。

望みの一つは叶い、一つは叶わな
かった。岐阜高校には残ったが、学
年を離れ進路指導を担当すること
になった。

結果として、さらに六年岐阜高校
に残った。気がついたら一番の古株
になっていた。

君らに出会ったのは、僕の教員生
活二十四年度の春。そこを折り返し点
としてさらに二十四年、今年僕は二
度の定年を迎えた。

教員になると言った僕に、学生時
代の友人は言った。「お前の性格で
は」三年もたないだろう。」

教員になった時、定年まで三八年
と聞いて、頭がクラクラした。自分
でもとてもたないと思った。

最初の定年を迎える一年前、一区
切りつけるつもりで大学に籍を移し
た。東日本大震災の年だった。

ここでの仕事は、国語の先生を目
指す学生に、授業作りのワーク
シヨップを行うこと。そんなこんな
でここでも一一年が過ぎた。気がつ
くと七〇歳になっていた。

振り返って思うことは、人生、詮
ずるところ出会いと別れ。

ある日僕はどこからかここに来
て、またどこかへと去って行く。そ
の間の数十年間、繰り返すのは出会
いと別れ。大事なものは、地位でも名
誉でも、ましてお金でもなく、そこ
での一つ一つの出会いと別れ。

教師となったことの冥利は、沢山
の出会いと別れを繰り返して、沢山
の苦も楽も味わえたこと。年月に晒さ
れて、苦は昇華してあらかた消え、
楽は結晶して今に残る。あの顔、こ
の顔に出会えたこと、それが僕の財
産の全て。

「往事渺茫都似夢」（白居易）



小池 秀男 先生

常識で考えるな・常識を 考えよ

平成11年卒担当 理科

浦崎 太郎

初耳の人も多いだろうが、私は五
年ほど前より、東京に所在する大学
の教員として「高校教育改革の支援
を通じた地域創生」に挑んでいる。

今日、高校教育もまた「競争」か
ら「共創」への転換が求められてい
る。強みを活かしたい、弱みを補い
あつことで、新たな価値や社会を創
り出していく力を高める教育への転
換だ。ここで、こうした教育を実現
するには、地域との連携が欠かせな
い。それは、地域は学校よりも多様
性や現場性が高いため、自走や夢中
につながるスイッチが入る機会が多
いほか、大人と共に実社会で価値を
創造する経験を積む機会にも恵まれ
ているからだ。

改革を進めるには常識の更新も求
められる。すなわち、生徒を「既存
の社会に適合させるべく、外発的に
規格化するべき対象」とみる見方から
「新たな社会の創り手として、個性
が内発的に伸びていく可能性を秘め
た主体」とみる見方への更新だ。

しかし、それは容易ではない。恥
ずかしながら、私自身そう認識でき
たのは、つい最近のこと。「いった
い何年の月日を浪費したのだらう」と
思うと悲しくもなる。ただ、時間
を要したとはいえ、ここに到達でき
たのは、皆さんと岐高で過ごした平
成九〜一〇年度頃の経験が土台に
なっているのは間違いない。

当時、宅習時間が前年比で一日
六〇分も減るなど、かつて経験した
ことのない事態に見舞われていた。
それに対して、学年会でも生徒を思
い浮かべつつ活発に議論を行い、打
てる手は打っていった。若手の同僚

を中心に「自分達で打開していく」
という気概に満ち、校長の後押しも
ある、いま思えば得難い環境だった。
同窓生の端くれとして「岐高が岐
高でなくなる」ことは避けたいとい
う想いも強かった。物理学を学び直
したのもこの頃で、学問を楽しむた
めに登校している生徒から「今日の
授業は満足であった」という表情を
引き出すことに喜びを感じていた。

今日、教育施策の是非を物理学的な
美的センスから見極められるのも、
社会の仕組みと世界観との関連性を
俯瞰できるのも、危機にあって物理
学を学び直せたからこそであり、当
時の岐高に在職していなければ獲得
できなかったことは間違いない。

何より、あの頃に受けた衝撃の真
因が、生徒だった皆さんではなく、
時代が激変しているのに染みついた
常識を自覚できなかった自分の愚か
さにあったと気づけたことは。

今日の閉塞感「公式を覚えて
代入」式の仕事、すなわち「常識で
考える」ことしかできない大人の蔓
延と決して無関係ではないと思う。

「青は藍より出でて藍より青し」：
あの時代を岐高で生きた者にしか成
しえないことがあると強調し、皆さ
んへのエールとしたい。



浦崎 太郎 先生

特集4

同窓生たちの寄稿

今もすてきな同窓生たち
みんなちがってみんないい

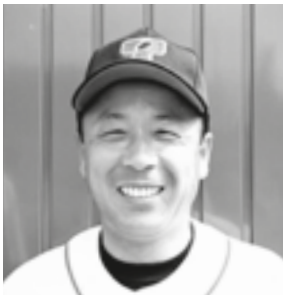


思い出の甲子園出場

昭和54年卒 3年8組
大塚 淳人

昨年夏から、勤務地が岐阜市になった。市内を歩くのは高校以来で大変懐かしい。財界や行政などの挨拶先には、岐阜高校出身者が多く、着任して間もない者にとり、同窓の繋がりや強さは、大変有難く心強い。さて、岐阜高校での思い出は、やはり第五〇回選抜高校野球出場。本原稿作成にあたり、久しぶりに写真や記事を見返すと、当時の懐かしい思い出が蘇ってきた。振り返れば、甲子園出場は本当に運が良かったと思う。しかし、投打、走攻守のバランスの取れた良いチームで、結構強かったなあと思う。佐藤・平井君のバッテリーは安定感抜群で、後藤君と私の二遊間、杉山、鈴木、加藤、高場君の外野陣もよく守った。また、いざという場面でみんな勝負強かったし、生田監督の采配は強気で功を奏した。二年の夏に県ベスト四になったことで、皆の目標が一気に甲子園出場となった。秋の県大会は、優勝候補の中京商業（現中京高校）に九回二死から大逆転勝ちし、勢いに乗り優勝。東海大会も準決勝まで勝ち上がり、甲子園出場が決まった。憧れの甲子園では、開会式の入場行

進曲が松崎しげるの「愛のメモリー」で、少し歩きにくかったことを思い出す。試合は、アルプス席の大応援団の後押しにより、一回戦は逆転勝利。応援団長は高崎君だった。私は、卒業後、長嶋茂雄さんに憧れ立教大学野球部へ入った。四年時は主将を務め、五〇歳からは四年間、監督を拝命した。また東邦ガス（株）野球部でも、三〇歳まで選手、その後監督を経験するなど、長年に渡りアマチュア野球に携わることができた。その原点は、岐阜高校で仲間恵まれ、甲子園に出場できたことだと思っている。先日、野球部の北川監督をグラウンドに訪ねたところ、部員に最後の甲子園組の主将として紹介された。あれから四四年が経ったのかと感慨深かった。私学の強豪校が増える中でも、近い将来母校の甲子園出場を願っている。



「岐高」とのつながり 〜今迄のこととこれからのこと

昭和54年卒 3年3組
永田 浩一

同窓会会報部長 北村文近さんから寄稿を依頼された。県・市立図書館の自習室仲間だった誼（懐かしいね）で気楽にお引き受けした。（それなりに）歳をとると遠い昔を思い出すことも多くなった。思い出話、近況、そしてこれからについて、自分の周りの「岐高」にフォーカスして思いついたことを書き連ねてみる。

私自身は、卒業後も岐阜から離れることなく（大学・大学院・就職）、その後東京一年、ロンドン二年、名古屋六年を除いては地元で五〇年以上暮らしていることになる。一九九八年に岐阜大学を離れ、現在は愛知県医療療育総合センター発達障害研究所（春日井市のはずれ：通勤片道二時間弱…）で、発達障害（特に自閉症・知的障害・難知性小児てんかん）の発症メカニズムの研究を行っている（写真1）。発達障害は人口の五〜一〇％に発症するとされ、最近の重要な社会問題・医療トピックスのひとつである。遺伝子の変化が主要な原因とされているが、一〇〇種類以上の原因遺伝子が報告されていることから予想される

ように、症状が非常に多様であり、統一した治療方法がないのが現状である。私も、発達障害研究に特化した全国唯一の研究機関として、効率的かつ有効な治療法・診断法の開発を目指して研究を展開している。自分自身が直接実験をすることは無くなったが、若い共同研究者たちが神経細胞やネズミをモデルとして病気の研究を活発に行なっている（写真2）。余談ながら、当研究所障害モデル研究部・浅井真人部長も岐阜卒（平成元年）で、父上は数学の浅井克彦先生（受験などという些末な俗事を超越した高踏数学のひとつ。私は殆ど煙に巻かれていた。現在八〇歳で、大変お元気とのこと）。

さて、流石に県下随一の進学校だけあって、仕事をしていると国内外問わず、仕事をしていると国内外で「岐高」にあう。ロンドン留学中もクラスメイトが駐在員として赴任してきて、その偶然に驚いた。英国岐阜県人会も「ミニ岐高」だったし、昨年主催した学会（第五三回日本臨床分子形態学会）でお世話になった九州の教授も六年先輩だった。特別講演も後輩が二つ返事

で引き受けてくれた。同級生・先輩・後輩諸氏からのご協力に、同窓の有り難さを痛感した。愛知県の難病対策諮問委員会でも、何気ない世間話で他の委員が先輩だと判ると急にガードが下がる。一方、岐阜に暮らしているのだから当然色んなところで「岐高」と縁ができる。岐阜大学の上司、同級生、先輩、後輩には地元で活躍する友人知人も多い。大学の仲間から愛知県職員仲間からただの呑み友達まで、「岐高」には今になっても色々教えられている感じ。茶道の稽古に通ってみれば、師匠や集つひとたちで「岐高」の昔話にひととき心なごむ。「岐高」に公私共々助けられながら、これまで何とか面白おかしくやってこられた。定年まであと四年、優秀な仲間恵まれて最後まで仕事を楽しめるのは幸運としか云いようがない。が、研究には終わりが無い（というか「仕事」と違って興味が尽きない）。老害にならぬように第二の人生に向けた準備をそろそろ始めねば。広げてきた仕事を上手く「手仕舞い」して、後任にスッパリと引き継ぎをすることが次の目標になる。と、ここまでは決めたのだが、問題はその後何をやるかが決まっていないことだ。

「岐高」には一流の（というかユニークな）先生が多かった気がする。長良川の堤防から岐高の洒落た校舎を見て、「特別な」高校であることを感じる。自身の三人の子供たちはとうとう縁がなかったが、今後も優秀な先生と生徒が切磋琢磨できる環境が連続と続くことを祈っている。追記：コロナ騒動前には国語の高橋章先生を仲間とお訪ねして三十数年ぶりにお目にかかった。ドラマのシナリオも書かれた粹人だ。大変な時節であるが、恩師の先生はじめ友人、知人のご健康を祈りたい。



写真1 愛知県医療療育総合センター



写真2 執筆者の研究チーム。遺伝子からタンパク質、マウスまで幅広い研究手法を用いている。

岐阜高校と岐阜盲学校と 夏目漱石と私

昭和54年卒 3年4組

櫛部 啓子

平成二六年一月二九日、当時、岐阜盲学校に勤めていた私は、ひよんなことから「雑司が谷霊園」に教頭先生方とお墓参りに行くことになりました。墓の主は、森巻耳（もりけんじ）先生。森家の御子孫の方々と池袋のホテルで昼食を一緒にし、その折、夏目漱石から森先生のご子息に送られたお手紙を岐阜盲学校に託されて、いただいて帰ってきました。

森巻耳先生は、石川県のご出身で、明治二〇年に岐阜県尋常中学校の博物学と英語の教員として赴任されました。明治二一年、眼病のため退職。濃尾大震災で被災した盲人の悲惨な状況をなんとか救いたいと明治二七年に岐阜盲学校の前身である、岐阜聖公会訓盲院を創立されました。岐阜百年史によれば「明治四二年五月二七日、岐中の南、道を隔てた梅ヶ枝町に岐阜訓盲院が新築された。森巻耳とチャペルの苦闘一五年の成果である。この新築は海外よりの寄付によるものだ。」という記述があります。海外の寄付は大きかったです。国内の寄付も相当ありました。そのことに夏目漱石が大きく関わっているのですが、その前に。

森先生が岐阜中学で教鞭をとっておられたころ、学生であった、川瀬元九郎氏のことには触れたいと思います。会員名簿の明治二四年四月卒の欄に名前があります。ちなみに同じ年に有名な数学者の高木貞治の名前もあります。高木貞治博士も森先生の教え子のお一人だったのでしようか。この川瀬氏はアメリカに留学し、日本にスウェーデン式体操を持ち込んだことで有名な方なんだそうです。が、もう一つ、眼病を患う恩師のためにケロッグ博士のマツサイジ学の本を持ち帰ります。（ケロッグは、かの有名なコーンフレークのケロッグ）全部英語で書かれたこの専門書をどうやって日本語に訳し、点訳したか、本当に大変な作業であったろうと拝察します。チャペル先生が読んで森先生がそれを日本語にしたのでしようか。岐阜盲学校にはこの点字の本が残っています。その頃も、盲人が生計を立てるために、あんまや針の技術を身につけていたのですが、それは徒弟制度みたいな感じでした。それを森先生は、衛生学やマツサイジ学のようにカリキュラムを整え、きちんと学問に裏付けされた学

校にしていかれたわけです。

さて、森先生にはお子さんがお一人ありました。森巻吉さんという方です。この方は岐阜中学中退で卒業生の名簿には残念ながらお名前がありません。東京帝国大学で英文学を夏目漱石から習いました。卒業後もずっと交流があったそうです。巻吉氏は、その後、第一高等学校校長になっておられます。岐阜訓盲院校舎新築のため、夏目漱石が発起人の一人となり、慈善演芸会を計画し、川瀬元九郎さんとともに奔走します。最初に述べた私たちが東京でもらってきた手紙は夏目漱石が森巻吉さんにあてたこのときのものでしたのです。そこには、慈善演芸会の切符のことが書かれています。先方の人に売り損なったとか、自分が買った分は現ナマで同封したとか、それとは別にいくらかの寄付もしたいなど・・・。文体こそ明治時代のものですが、内容は気さくなものでお二人の親しさが感じられます。

森先生が盲人だから仕方がないとか、目が見えなくなったら何もできないとかと絶望せず、これも神様の試練と視覚障害者の教育や福祉の道を開かれました。ここに我がことを結びつけるのもおこがましいのですが、あえて・・・。

一〇年前の同窓会のころ、盲学校の高等部で進路支援をしていた私は、視覚に障害があり、しかも知的障害もある生徒さんたちの進路先でいろいろ悩む日々でした。目が見えないからしかたないとか、何もできないと諦めてしまおうのでなく、学校生活の中でつけてきた力を生かして仕事をしていけないか、「盲重複障がい児・者のこれからを考える会ポコアポコ」という団体の立ち上げに参加し、生活介護事業所アンダンのサービスマン管理責任者になりました。みんな元気にクッキーを焼いたり、手織りをしたりしています。そして私たちの事業所も手狭になってきて新しく建物を建てようとしています。「慈善演芸会」はできないけれど、いろいろな方々のご支援のもと、これからも盲重複障がいの人たちが誰に遠慮することなくのびのびと自分らしく生きていけるよう、できることをしていきたくと思っています。



一野球ファンの目線で振り返る、 1978年春のセンバツ、岐阜高校の戦い

昭和54年卒

3年7組

山田 敦

一九九一年に企業の駐在員として
移り住んだ台湾で独立、起業。今も
台北で自動車産業関連の小さな会社
を営んでいます。気づけば、人生の
半分以上をここ台湾で過ごしたこと
になります。岐高時代の最高の思い出、七八年春のセンバツとその前後
の岐阜野球部の戦いを振り返ってみ
たいと思います。

私たち七九年と一つ下の八〇年卒
業組は幸せだ。四四年前、岐阜高校
の直近の甲子園での戦いをアルプス
スタンドでこの目で見られたのだけ
ら。私たちが岐阜へ入学した一九七六
年春の段階で、岐高の甲子園出場を
予想した者が一人でもいただろう
か。その「ありえない」が「ひよっ
としてあるかも」に変わったのは翌
七七年、二年生の夏。ノーマークの
ダークホースとして県大会をベスト
四へと勝ち上がった岐高は準決勝で
岐阜南に敗れるも、夢の甲子園が一
気に現実味を帯びて来る。

七七年秋、新チームの主力二年生
は自分たちの同学年。頭脳派エース
佐藤、キャッチャー四番平井、とも
に俊足好守好打、セカンド後藤、
ショート主将大塚の一、二番コンビ、
杉山、鈴木、加藤の外野陣は打力、
守備力とも県内No.1。しづとい
バッテリー、固い外野守備の高場、

片桐。不運なケガで正キャッチャー
からマネージャーに転じた杉山はこ
のチームの精神的支柱だ。先発メン
バーではファースト五番広瀬だけが
一年生。このころには岐高強し！の
イメージも浸透し、秋の県大会を順
調に勝ち上がり優勝。準優勝の大垣
商とともに東海大会へ。初戦の四日
市工業に三一二で辛勝すると、準決
勝の相手は、圧倒的優勝候補の中京
(現中京大中京)。中盤の五回、四番
平井のホームランなどで一気に中京
を逆転。最終盤で再逆転を許し四一
六で惜敗するもセンバツに王手をか
ける堂々のベスト四。準優勝の浜松
商、同じくベスト四の刈谷とともに
センバツ切符をつかんだ。(優勝の
中京は部員の不祥事で選考を辞退、
涙を飲む。)

そして迎えた甲子園一回戦、相手
はやや格上と見られていた吉備(和
歌山)。この試合、岐高は投打がか
み合い九一四で快勝。岐高にとつて
は一六年ぶりの甲子園での勝利。文
武両道、公立進学校の甲子園出場は
今も昔も必ず話題になる。この年、
前橋高校の松本投手が一回戦、比叡
山戦でセンバツ初の完全試合を達
成。岐高とともに見事、一回戦突破
の快挙を演じてみせた。

二回戦の相手は、高校屈指の本格

左腕木暮、No.1スラッガー阿久
沢を擁する優勝候補の一角、桐生(群
馬)。相手にとって不足なし。早朝
の第一試合、試合は岐高応援席のた
め息とともに桐生ペースで淡々と進
み、〇一七の惜敗(?)。岐阜野球
部のセンバツは終わった。

大会は同じ東海代表の浜松商が優
勝。準優勝は福井商。共に岐高とそ
う身の丈が合わない公立校。こうな
ると岐高の甲子園優勝というのま
んざら夢とも言い切れない、運と勢
いさえ味方につければ意外と手の届
きそうな現実のように思えてきたか
ら不思議だ。

尚、桐生のエース木暮は翌年、早
稲田へ進学。岐高応援団長の高崎君
や自分は四年間、神宮球場で自軍の
エースとして彼を応援することにな
る。共に立教へ進み主力選手として
活躍した主将の大塚君、一学年下の
広瀬君は神宮で何度も木暮と対戦し
たのではないかと想像する。お二人
の大学、社会人野球の指導者、高校
野球解説者としての活躍は今さら説
明不要だろう。

甲子園での一勝により高校球界、
メディアでの扱いもガラリと変わっ
た。夏の予選は県内の有力校もすべ
て打倒岐高を目指して集中力を高め
てくるだろう。下馬評は岐高と県岐
商が最有力。ここに大垣商、中京商、
市岐商、岐阜南などが紙一重で迫る
というもの。我々三年生も受験勉強

そつちのけで応援に駆け付けた。岐
高は順当にベスト八へ勝ち上がり、
ついに準々決勝で「岐阜の早慶戦」、
岐高vs岐商が実現する。アンダース
ロー野村、強肩キャッチャー藤田(筆
者)と島中学(同級生)のバッテリー
を軸に伝統の岐商野球を展開する総
合力の県岐商。勝った方が甲子園と、
がつぱり四つで戦った結果は一三
の惜敗。同級生たちの二年にわたる
甲子園をめぐる戦いはここに幕を閉
じた。

その夏、甲子園での県岐商は愛甲
投手の横浜、春に岐高が手も足も出
なかつた桐生など全国屈指の強豪
校、優勝候補を次々と撃破しベスト
八に駒を進める。準々決勝で優勝し
たPLに〇一で敗れたものの、岐
阜の野球ファンにとっては忘れられ
ない夏となった。

私は岐阜の野球ファンとして一生
のうちに一度でいいから岐阜卓勢の
甲子園優勝をこの目で見たい。当面
その夢は鍛冶舎監督の県岐商、阪口
監督の大垣日大両校に託そう。だが、
岐阜野球部にももう一度、あの七八
年春の奇跡を再現していただきたい
。野球部のみなさんの一生懸命な
プレーを
我々卒業
生は常に
応援して
います。



筑波研究学園都市での37年

昭和54年卒 3年4組

小木曾久人

私が、筑波研究学園都市で暮らすようになって、三五年以上が過ぎた。東京一極集中の弊害をなくすために、首都機能移転を目的に作られた街だ。そのため、各省庁傘下の国立研究所がこの地に移転してきた。私が赴任した一九八五年はこのような移転作業は街の整備がひと段落し、その象徴的なイベントとして、科学博覧会が開催されていた最中であった。この時は、まだこの人工都市は、

人の住む街としては未完成だったかもしれない。東京へのアクセスも悪く、陸の孤島とも言われ遊ぶところが少なく、大きな駐車場をもつ飲み屋という不思議な光景が揶揄され、自殺率が高いという報道や、AERAに「科学の街は嫁不足」なる見出しの記事が出され、私の職場の先輩が一人彼の部屋にいる姿の写真として掲載されるなど、歪な街として紹介されることしばしばであった。このような状況が一変したのは、二〇〇五年のつくばエクスプレスの開通であろう。これにより沿線の住宅開発がすすみ、電車で通い、帰りに駅の近くの居酒屋で一杯飲んで帰

ることができる、徐々に普通の街になっていった。前述したAERAも手のひらを返したように、つくばを移住しやすい街として紹介するようになった。現在は、私も住みやすいつくばを享受して生活できるようになったのである。しかし、かつての閉鎖的な街の中で、研究者間の田舎的に濃密な人間関係での生活は、研究者としての私を大きく育ててくれたと懐かしく感じる時も多い。

国立研究所が多いつくばでは、研究内容も国の科学技術政策に左右されることも多い。街の雰囲気が変わっていくのと同様に、この三〇数年で研究環境も変わってきている。入った工業技術院機械技術研究所は、通産省に所属し、入所当時は、国が大きな研究予算を投じて、次世代と目される産業目標に対して国が大きな企業群と国の機関が合同で行ういわゆる大型プロジェクトというものに盛んであった。しかし、海外から日本の基礎研究ただのりなどの批判も強く、国立研究所が民間と同じような目標の研究をすることはタブー視されるようになり、基礎研究

が重視されるようになった。私も新設された産業技術融合領域研究所に籍を移し、産学一体プロジェクトながら、原子・分子操作技術という、のちにナノテクノロジーと呼ばれるような分野の研究に携わるようになった。研究者として充実した時期に、

このように自由な基礎研究に携われたことは非常に幸運だったと思う。しかしながら、バブルが崩壊したのち日本経済の低迷が長引くと、今度の実用化から遠い研究はいけない、研究所が多くあるのは再編する必要があるということ、二〇〇一年の省庁再編と同時に、工業技術院傘下の研究所を統合して、現在の産業技術総合研究所が発足し、そのままそこに籍を移すことになる。私自身もそこに籍を移した。現在は積層造形装置の研究などをしていて、残念ながら、この二〇年間、論文シェアなどがからみる、日本の科学技術研究の国際的地位は低下しつづけているのが現状である。地位低下の当事者の一人として責任を感じている。とはいえ、ここは依然科学技術が集積されている地であることには変わりはない、二〇一七年ロイターが選んだ世界の国立研究所ランキングに、五位の産業技術総合研究所、一二位

の物質材料研究機構、また一三位の理化学研究所のブランチャが、ここに集まっている。

科学もある意味日常になり、国策にも振り回されていると、自分では気がついていなかったが、若い頃の科学に対する情熱が薄れかけていたのかもしれない。そんなときに、嬉しいニュースが飛び込んできた。岐阜高校が、二〇一七年の「全国科学の甲子園全国大会」で名だたる進学校を抑えて優勝したのだ。この大会の決勝戦はつくば国際会議場で開催されるので、結果はローカルニュースでも取り上げられる。優秀な後輩たちのおかげで、私の学歴にも箔がついた形になった。それと同時に、純粋に科学者に憧れていた高校時代を想起させてくれた。私も研究者の経歴としては一線を退く年齢になったが、後輩たちの頑張りを受け、高校時代の気持ちだけはずっと残している。こうとういふ気持ちにさせたくれていてる。



つくば市中央公園

岐阜高校は私の原点

平成元年卒

3年6組
広瀬 修

岐阜高校を卒業されて社会で活躍されている皆様も、順風満帆な時ばかりではなく、多くの苦労・困難を乗り越えて、そして、多くの方々を支えられて、今現在があるのではないのでしょうか？

三五歳で岐阜市議会議員、四五歳で岐阜県議会議員に当選させていただいた私ですが、多くの方々の支えがあったからこそ、五二歳を迎える今に至るまで議員を続けることができた、感謝の気持ちは尽きません。

議員として人生を歩んでいる私の中に「声に出せない人たちの気持ちにも耳を傾ける」という思いが存在し続けています。その思いの原点を遡ってみると、岐阜高校での挫折や経験の数々が思い出されます。

その中の一つを紹介させていただきます。硬式野球部で努力を重ねてもレギュラーを獲得することができなかった「最後の大会での負け試合」です。試合がまだ終わっていないにもかかわらず、八回あたりで涙が溢れて止まりません。それは、負けることが悔しいという涙ではなく、力を合わせて三年間頑張ってきた仲間と勝ちたかったという思いが一つ。そしてもう一つ、中学生の時にはレギュラーとしてグラウンドに立っていた自分が、高校生の今はレギュラーを獲れず控え選手としてベンチにいる。光と影、その両方を経験したことによる自分に対する涙でした。それぞれが努力を重ねてレギュラー

としてグラウンドに立っていることに間違いはありません。しかし、そこには周りの人たちの支えがあり、周りの人たちの思いを背負ってグラウンドに立っているのだということを、ベンチにいた経験から知ることができました。

三五歳の時、地域に貢献していたわけでもない世間知らずの私に思いを託し、議員へと押し上げてくださった皆様への感謝の気持ちが尽きることはありません。「声に出せない人たちの気持ちにも耳を傾ける」と同時に「支えてくださっている皆様の思いを背負って議員としてグラウンド(フィールド)に立たせていただいている」その責任や思いを貫くことが、皆様への恩返しになると信じて歩み続けています。

岐阜高校で落ちこぼれた私が、周りの人たちの支えがあるおかげで、今は岐阜県議会議員をさせていただいています。だから、感謝の気持ちを忘れず、これからも今まで以上に覚悟を持って頑張っていきます。そして、高校生活での挫折や経験があったから感じられた、「声に出せない人たちの気持ちにも耳を傾ける」を貫き続けたいと思っています。

だからこそ「岐阜高校は私の原点」なので感謝!!



それはかけがえのない時間だったのだと。

平成元年卒

3年8組
神谷 慎一

高校時代は、なんともいえない「苦い」思い出として記憶されています。青春を謳歌するような輝く時間であつたら良かったのですが、「砂を噛むような苦しい時間だった」というのが率直な思いなのです。

理由を探せばいろいろ思い当たるのですけれど、どのつまりは勉強にについていけなかった、ということ。テストの点数はいつも悪かつたし、成績も酷かつた、ということ。少なくとも、私にとつて、岐阜高校は、勉強ができる・できないということ、自分の思いを評価されているような、そういう活動を全然うまく行きませんでした。サッカーを三年間続けたのですが、レギュラーどころか、ベンチにも入れませんでした。二年間、公式戦に出場することは一度もできず、どこをとつてもチームに何の貢献もしておらず、自分言っても残念ですが「お荷物部員」でした。勉強も、部活も、何をやっても思うようにいかない。そういう三年間でした。

それは、大きな挫折だったのだと思います。岐阜高校に入學してくる生徒は、誰もが中学校では成績上位です。中学までは、これといった努力をしなくても、勉強で苦労することがほとんどなかった生徒も多いと思います。でも、岐阜高校に入るまでは、勉強で悩んだことはありませんでした。勉強ができることは、当時の自分にとつては自信の源でした。サッカーも、それに努力が報われていました。それが、岐阜高校では全く通用せず、何をやっても思うようにはいきませんでした。そして「砂を噛むような」息苦しさが残ったのでした。

大学で岐阜を遠く離れて北海道に渡ったことは、そういう屈折した思いを和らげてくれたように思います。北海道の雄大な自然は、それ自体が心のびのびとさせてくれました。それ以上に、「過去の惨めな自分を知っている人がいない」ということが重要だったかも知れません。居心地が良さすぎて、一〇年も北海道に住んでしまいがちです。

一〇年ぶりに岐阜に戻ると、時々、岐阜高校の卒業生と再会したり巡り会つたりする機会が出てきました。仕事を始めると、その機会は、さらに増えました。高校時代はそれほど親しかったわけではなかったり、言葉交わしたこともすんなりなかったり、そもそも一緒に入学・卒業したことすら認識していなかったり。それでも、「百折不撓」「親単」「山貞」、それだけで、時間が巻き戻りました。同じ「岐阜高校」で三年間を過ごした、というだけで距離が近づく感じがしました。そして、だんだん、「しんどかったけれど、悪いことばかりでもなかったな。」と思えるようになりました。やがて、あの「砂を噛むような」思い出が、とても大切な、かけがえのない時間だったのだと、心に染みるようになりました。今は、岐阜高校の卒業生の皆さんと過ごす時間が、本当に楽しいです。

そこで、少し偉そうですが、もしかしたら、私と同じような息苦しさを感じているかもしれない後輩達、特に、現役の岐高生の皆さんにエールを送ります。その時間が、いつか必ず、人生の大切な宝物になるから。百折不撓で、とにかく歩ききろう。そして、いつか、どこかで、岐阜高校の思い出話をしましよ。その日を待ってま

待ってま



食で繋がる

平成元年卒 3年3組

馬場 美穂 (旧姓南倉)

「焼きそば」メーカーに嫁ぎ四人目を
出産した年に料理教室を始めました。
日本の伝統食材「麴」の魅力は知れば
知るほど無限大であり、多くの方に周
知いたたくべく各ライフステージを対
象にメニューを提案していこうと考え
ました。例えば、調理科学の要素を取
り入れた教室は子供達が実験感覚で食
に興味をもつてくれました。また多忙
ママの要望から考案した「フライパン
ひとつでおかず四品」教室は大人気。

思い起こせば高校時代からすでに食
に対して欲も関心もあつたのかな。当
時は空腹故に早弁をすること、お昼時
には焼きそばパン目当てに購買部めが
けダッシュしたことなどは日常茶飯
事。登校時、明郷中学生でこつたがえ
していた忠節橋上で北高生の自転車と
正面衝突したはずみで、かごからお弁
当箱が長良川に真つ逆さまに落下。そ
の日の昼食は皆から一品ずつ恵んでも
らった事もありました。

これまでに食にまつわる資格は必要に
応じて取得してきましたが、四〇代にな
り、管理栄養士を取得するため人生二
度目の大学受験をしました。仕事・育
児・勉学の両立は大変でしたが、特権
である学割をちゃっかり活用しながら
四年間の大学生活を終えました。資格
所得後、食は予防医学の観点で更に重
要性が高まると実感し、高齢者・一人
暮らし・子供の食の自立を促す活動を
開始。健康寿命を延ばすための食生活
の講演、認知症予防の三行レシピ、生
活習慣病予防の簡単ヘルシー料理等、
食で健康管理ができる発信だけでなく、
パフォーマンスに大きな影響を及
ぼすアスリート食の講演・メニュー提
案もしています。

今では活動内容が広がり、生協・JA

の認定講師、各種食品メーカーのメ
ニュー提案、サポイン事業の顧問、N
HK・メーテレの料理番組等を担当さ
せていただいています。

三年前には災害ボランティアに参加
し被災時における食の酷さを痛感し防
災士資格を取得。自分の命は自分で守
る自助力の形成を促すため、どの家庭
にもある乾物と缶詰を使って簡単に料
理ができる「乾・缶・簡料理」を考案。
非常時、貴重な水源を再利用し誰でも
簡単に食べ慣れた食事が作れる料理方
法は、柴橋岐阜市長のご理解のもと、
共に動画撮影、手軽さと重要性の発信
においてご助力いただきました。

高校在学中の思い出で鮮明に残って
いるのは、プラネタリウムのような美
しい星空を屋上で寝転がってみた林間
学舎。子供の在学中に保護者の立場と
して参加。中には当時の同級生も一
緒され、プチ同窓会の気分で童心に戻
り存分に楽しみました。

仕事や人との繋がりを通じて「さく
ら組」の知性と誇りを体現する輝く同
窓生たちが岐阜にとどまらず日本全国
幅広く活躍されていることを多々実感
する毎日です。

週末早朝、千仞の嶽金華山に登頂し、
頂上で朝日のパワーを浴び、百里の水
長良川を眺め心身ともにリフレッシュす
る事が数年前からの習慣となっていま
す。今後もこの自然あふれる岐阜で、
食で繋がる
皆様に感謝
の気持ちな
かみしめな
がら健康提
案をしてい
きたいです。



岐阜水泳部での思い出

平成元年卒 3年8組

浜崎 貴敏

今、岐阜高校に行くのと、一〇年ほど
前に建替えられて大学のようになっ
た校舎が出迎えてくれます。とても
素晴らしい校舎なのですが、少し寂
しく感じます。なぜなら私の高校生
活はプールと共にあつたからです。
小さい頃から水泳を続けてきた私
は、高校に入ったら、水泳部に入部
することを決めていました。

入部した春、五月の連休後、まだ肌
寒い日もある頃から泳ぎはじめます。
その当時長良川の水をそのまま流し
込んでいると噂されていたプールの
水はとても冷たく、唇は真つ青にな
り、震えが止まらなくなるほどです。
練習の後、一斗缶の焚火にあたりな
がら、先輩マネージャーの方が出し
てくれたホットミルクティーの温か
さが忘れられないのですが、昭和と
はいえ、プールサイドで焚火なんて
やって良かったのか…。

しかし、私の中では楽しい高校生
活のはじまりの良い思い出となつて
います。

プールの水があつたのか、先輩達
に恵まれたのか、苦しい練習も楽し
くでき、それまで目立った成績も出
せなかった私が、一年生の夏の東海
大会に出場することが出来たので
す。その時の先輩達に、いろいろな

ことを教えてもらったことは、私の
財産になっています。

まだまだ高校生活は続くのです
が、それは次の話として、同じ高校
に進んでくれた娘のことで岐阜高校
に行くたびに、西門のかたわらに
プールの無いことに時代の流れを感
じています。

その後、いろいろなスポーツを
やって来て、今は、息子と一緒に始
めたテニスを楽しんでいきます。おじ
さんになってからのテニスは、スト
イックにやっていた高校時代の水泳
の練習と比べると楽しく事か
と、高校の同級生とも一緒に活動し
ています。息子には、とうに抜かされ
ていますが、それも嬉しいことです。

現在は、岐阜市の西の端にて寿司
店を営んでいます。父親が始めた小
さな店ですが、地域の皆様に美味し
い寿司を召し上がってほしいと地道
に取り組んでいます。コロナ禍に翻
弄されな
がらも、
毎日進ん
でできた
いもので
す。



岐阜の介護と福祉を考える

平成11年卒 3年1組
渡邊 雄介

同窓会会報誌への寄稿依頼を頂き、一度も同窓会へ参加したことのない私ではないのか、とも悩みましたが、これも何かのご縁、「頼まれごと」は試されごと」と思い、お引き受けしました。一度も同窓会に参加したことはないとはいえず、決して岐阜高校愛がないわけではありません。ただ、単純にタイムミングが合わなかった、それだけだったんです。今回、この機会を頂き、これを機に同窓会へ出席を試みようとも思っております。

同窓生の近況ということで、僭越ながら、私の現在をご紹介させて頂きます。私は、作業療法士として、発達障害児、重症心身障害児などのリハビリテーションに従事しております。一〇年間は民間の医療機関で勤めました。その後、子どもたちの居場所づくりを目的として独立して、通所介護施設(高齢者のデイサービス)、障害児通所サービス(放課後等デイサービスなど)、訪問看護ステーションなどを運営する会社を起業いたしました。そして、令和四年四月で一〇周年の節目を迎えようとしています。先日念願かなって本社施設を岐阜市下奈良に建設し移転することが出来ました。もともと、各地に点在していた事業所を集約し、障がい児から高齢者までが安心して過ごせる居場所として、「共生型」の総合施設を作ることが出来ました。福祉施設、介護施設は郊外に建てられることが多いのですが、今回はあえて、県庁のおひざ元に居を構えることにしました。子どもたちから高齢者までが生き生きと笑顔で過ごす居場所を、ぜひ皆様知ってほしいからです。高齢者施設、障がい者施設は暗いイメージをお持ちの方が多く、弊社の高齢者デイ

サービスでは、利用者の方が生き生きとされています。趣味をされている方、お友達と将棋やオセロに興じていらつしやる方、リハビリをなされている方、みなおもしろい過去をされています。また、子どもたちは、保育士の先生方と笑顔で廊下や庭を走り回っています。全然暗いイメージなんてないんです。他のサービスと違うところは、高齢者と子供たちがいつも触れ合える距離にいます。コロナがなければ、行事はいつも一緒に行っています。自閉症と言われている子が、気難しいと言われている頑固なおじいちゃんのお膝に乗ってお誕生日会をやる姿が、珍しくありません。ぜひ、コロナが落ち着いたらいつでも見に来てください。きっと驚く光景がそこには広がっていると思いますよ。

「人生、百年時代」、この言葉がささやかれるようになって久しいですが、私は、人は最期の瞬間まで役割を持ち、人に感謝されるべきである、と常づね思っております。年を取って、介護してもらって「ありがと」を言って終わるのではなく、「今日も来てくださってありがと」「今日も我々の知らないことを教えてください」という「最後まで感謝をされて過ごしていただきたい、それが私の願いでもあります。そんな、施設を目指して、「百折不撓」の精神を肚に据え、日々スタッフと共に、笑顔で頑張っています。



あの頃の思い出とともに

平成11年卒 3年5組
坪井 文菜

今回、同窓会会報の寄稿依頼をいただき、高校時代以降を振り返ってみました。私は平成一一年に高校を卒業したので、現在まで、二三年という長い年月が経とうとしています。

私は、旧穂積町(現在瑞穂市)出身であり、最寄りの穂積駅からJR東海の電車に乗り、岐阜駅で降り、当時はまだ市電電車が岐阜市内を走行していたので、岐阜駅からは徒歩・自転車・バス・市電電車の四つの方法で登校していました。朝、岐阜駅に到着した時間や、その日の天候、その時の気分など、の方法で高校まで辿り着こうか考えるのが、よい気分転換になっていました。

つい先日、岐阜市役所を見学した帰りに、高校に寄ってみたところ、校舎は以前の面影が全くなく、キレイな建物に様変わりしていました。私たちの頃は、本当なのか嘘なのか、校舎の床が傷つくから、という理由で、革靴は禁止、スニーカーのみ許可されていた。スニーカーにルーズソックス、大半がリュックサック、というのが、当時の岐阜高校生スタイルでしたが、今はどうなのでしょう。

高校卒業後は、岐阜大学医学部に入學し、大学卒業後、一旦岐阜を離れ、愛知県内の病院で約十年勤務したのち、やはり地元で、特に医師不足とされていた岐阜県の医療に少しでも貢献したいと思い、六年前より大垣市内の産婦人科クリニックに勤務しております。

現在は三児の母として、仕事・育児・家事に奮闘する日々を送っています。朝起きてから、まずは夫と三児を見送り、自分の支度はそのあとです。クリニックでは、妊婦健診や子宮がん健診などの外来業務、合間に出産があれば立ち会い、午後は帝王切開術などをこなしております。【母子ともに無事に



出産を終えること)、そのお手伝いができるこの仕事に、誇りを持ち、そして、関わらせていただける患者さん・スタッフに感謝の気持ちを持って、日々診療にあたっています。私にとって、この仕事は生き甲斐であり、大変濃厚で充実した時間で、あつという間に過ぎてしまいます。その後が第二ラウンド、保育園に迎えに行き、夕飯の準備をし、子供達に食べさせ、お風呂と寝かしつけを終える頃、夫は帰宅します。あーあれもやりたかったのに、あそここの片付けもしたかったのに、と後悔の塊とともに眠りにつくのが、あの意味幸せなのかも、と思う今日のごろです。

末っ子が一歳になる頃、やりたかった念願のキャンプを始め、キャンプ場巡りが楽しみの一つになっています。テントの中でエアベッドを膨らませて寝るだけで、子供達はとても喜んでくれ、テンションはマックスです。夕飯は、焼きそば、焼肉、炊き立てごはん、野菜スープ、朝食は、チーズとハムを挟んだホットサンド、コーンスープが定番です。特に凝ったキャンプ飯ではないのに、子供達がめっちゃ美味しいって喜んでくれます。まだまだ、岐阜県内各地のキャンプ場巡りは続きそうです。地元岐阜を愛しながら、これからも堪能させていただきます。

岐阜高校、再入学

平成11年卒 3年7組
田中 良平

午前零時二分名古屋発東海道本線終電車。木曾川の橋脚を過ぎ、列車は緩やかに左に進路を変え、決まって右側に腰を下ろす私の目に、市街の灯りを見下ろす、黒々とした千仞の嶽が迫る。

堅牢な堆積岩からなる独立峰である金華山の威容は、起伏の少ない濃尾平野のなかにあつて、標高二二九メートルでありながら、突如現れた壁のように立ちほだかり、いよいよ始まる厳しい山間部への門扉のようにも見える。しかし、岐阜に育ててもらった私の目には、黒々としたその姿は、むしろどっしりとした優しささえ滲えて映り、不思議と毎度心が和む。

私はいま、猖獗を極める疫病の小康を見ながら、岐阜と東京を行き来する生活をしている。岐阜の同窓である妻と結ばれて、息子ともども都内にいたのを、息子の進学を奇貨として、二人の実家からほど近く、金華山の南裾、梅林の香りが届く昔家に越し、のんびり手を入れながら暮らしている。学生時代から続けている予備校講師業は、この状況にあつても需要が高く、私だけは都内に留まり、単身赴任の現し身で、金曜の終電車に飛び乗って帰岐の日々。闇に浮かぶ金華山が、迎えてくれる週末だ。

岐阜を卒業後は、東京外国語大学に進学。英語を主専攻とする科に属しながらぼんやりと国際関係論を志していたところ、言語としての英語そのものと、英米文学に没入。研究者となる道も模索したが、生きる糧のための講師稼業が、気づけばすっかり板に付き、今日に至る。学生時代も含めれば足掛け二四年。毎年四、五〇〇人の学生を

迎え、累積で二万人近い学生を指導してきた。

昔は良かったと、懐旧趣味に走ってしまえば教師の賞味期限は切れたも同然。しかしこのところよく思うのは、地方出身者の知的貪欲と、あの頃の岐阜に瀰漫していた朗らかな冀求心である。

都心の進学校に通う学生をもつぱら担当しながら、特別公開授業などでは、地方の学生をみることがある。かれらの目の輝き、納得なくして前に進まぬ頑なさ、なにより、いま学んでいることが役立つかという狭隘な功利主義とは無縁の、学ぶこと、知ること、考えることそのものを楽しむ姿に、四半世紀前の岐高生を重ね合わせる。多分にノルタルジイが悪戯をしているだろうし、都心の学生を照らす学燈も決して全てが暗くはないけれど、そんな目をした学生が、この岐阜という街にもあの大縄場の学び舎にもまだいるだろうと想像するのも嬉しい。東京で働く身の安泰を、岐阜暮らしの心の安寧と入れ替えて、これまで培った経験と智慧の種を、故郷に時々毎日もいいかなと思う。

戻ると、家族と過ごす合間を縫って、市内をひとり見て歩く。遅刻を恐れ、自転車で駆け抜けただけの岐阜が、ようやくよくいま、私には見えてくるようになった。見上げれば金華山。水路をたどれば長良川。鄙びた街並みの味わい。住まう人々の温かさ。不惑を過ぎ、心の岐卓高校に、もう一度私は入学した気持ちでいる。



「こちやまぜが面白い!!」

平成11年卒 3年9組
上松 恵子

受験番号一番!岐阜高校の合格発表の日。自分の番号を見つけてほっとした日のことをつい先日のように感じます。一五歳の私はこの学び舎で学べることに期待でいっぱいになりました。(その当時はポロポロの校舎でしたが、憧れの学び舎はキラキラして見えませんでした)

たくさんの方の恩師や学友から学びましたが、特に印象的だったのは、突き抜けている学友が多いということでした。一つの教室の中に、野球や卓球、そして合唱、化学。文化祭では短編映画をつくったり、など、自分が熱中できることに徹底的に向き合う学友を尊敬していました。そして、自分と違うことをしている、適度な距離感で見守ったり。応援したり。個性がこちやまぜになりつつも、お互いの個性を尊重し、面白がる。その空間を心地良く感じました。勉学にも秀でつつ、トンがる部分もある学友と席を並べられることが、誇りでもありました。現在、私は岐阜市内に住みながら、二つの会社に関わっています。一つは、女性の活躍に関する研修やコンサルティングを実施する株式会社代表取締役。そして、もう一つは、大学(特に名古屋大学工学研究科)の博士課程の研究支援。このように書く、共通点がないように感じますが、私の大切にしたい価値観「こちやまぜが面白い!!」が根底にあります。「こちやまぜの組織をますます面白くなるようにすることは、「ダイバーシティ&インクルージョン」やチームビルディング支援にも繋がっていると感じます。

例えば、女性の活躍支援では、女性社員(や、その上司)の方の働き方や

コミュニケーションの支援をしながら、職場での活躍をサポートしています。男性・女性関わらず、一人一人が生き生きと働ける職場になることで、職場の多様性を豊かにする。そして、お互いの違いを認めつつ、遠慮や忖度なく、お互いの気づきや意見を伝え合える。そんな関係性を築くことで会社のイノベーションや業務改善につながっていきます。ある製造業の会社では、パートの女性社員が生まれた一言から大ヒット商品が生まれる!なんていう素敵なドラマもありました。

また、大学の研究支援では、社会が急速に変化していく中で、スピード感を持って研究を社会実装するために、チームになって活動する支援をしています。このチームには、中国や韓国からの留学生も半数程度入り、専門分野も多様です。だからこそ、最初はお互いの背景や想いを理解するまでに時間はかかりませんが、チームが一丸となった時、ものすごく大きな突破力が生まれます。「早く行きたければ一人で行け」遠くに行きたければみんなで「行け」のごとく、学生たちがチームで果敢に挑戦する姿はキラキラしています。

まさに、「こちやまぜが面白い!!」としみじみ感じる毎日です。今年の同窓会のテーマ「トランスフォーマー」にも親和性を強く抱き、私の大切にしたい価値観を育んでくれた原点は岐卓高校にあるなあとしみじみ感じております。

